

阿部 敏夫 提出 学位申請論文

『北海道民間説話へ生成Vの研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、明治二年に明治政府の統治下に組み込まれ、北海道と改称された蝦夷地に本州から移住した、所謂「和人」たちがどのような「民俗文化」を創り出したのかを、この地に伝承されている口承文芸である「民間説話」から明らかにしようとしたものである。学位申請者自身による長年にわたる実地調査と諸文献からの研究に基づいて論じられている。

論文は「序章 本論の問題の所在と目的・テキスト・方法」、「第一章 北海道の民間説話伝承環境と研究史」、「第二章 和人創作の「アイヌ民間説話」」、「第三章 北海道の義経伝説」、「第四章 札幌・厚別の民間説話」、「第五章 産炭地

夕張・赤平の民間説話」、「第六章 北広島市「大蛇神社」伝説」、「第七章 中村純三版『江差の繁次郎』話」、「第八章 塚本長蔵と口演童話」、「終章 北海道民間説話の研究と今後の展望」の、全十章からなる。

序章では、多くの「和人」たちが北海道に移住し、定着するにあたって遭遇した自然環境への適応の労苦、先住アイヌ民族との接触と協調、同化など、さまざまな課題を六点に整理する。その上で、本論文の主題は「本州以南の伝統的社会と異なる集落形成をせざるを得なかった本州以南の移住者の厳しい現実のなかで、どのような「民俗文化」をその移住者たちが創り出して行ったのかを「民間説話へ生成Vの視点から探ることにある」といい、続いて、この目的に迫るために対象とした伝承素材の内容と研究方法を説明する。

序章での主題設定と研究対象、方法の説明を踏まえ、第一章では、北海道への移住者である和人による民間説話生成の背景として、その自然、地理、歴史、集落構成あり方が異なることを述べる。なかでも自然環境は、同じ雪国の東北・北

陸地域と比較しても衣・食・住のすべてに違いがあるなかで、移住者たちはアイヌ文化に触れながら、同郷あるいは出身地の異なるものたちによって集落が形成されたことを述べる。申請者は、こうした移住者の生活環境を、民間説話を生成し、伝えていく「伝承環境」と捉えている。

さらにこの章では、北海道における民俗文化研究の研究史の一端として、先行の民俗学者たちによる「北海道認識」を取り上げる。柳田國男は「北海道には民俗がない」とし、宮本常一は「敗北者」史観で分析し、梅棹忠夫は「北海道は亜種文化である」と論じた。そして宮田登は、北海道の民俗文化を「移民社会」の観点から探ろうとしたとする。しかし、こうした「北海道認識」は、本州以南の伝統社会を基軸にしたものであると批判する。その上で申請者は、北海道移民者の立場や、その民間説話の視点から北海道の民俗文化生成を考察しなければならぬと主張する。

第二章以降が、北海道における和人の民間説話についての伝承実態の明示と、

その整理と分析を進める章である。第二章では、現在も北海道内でよく知られている民間説話「紅スズラン」を取り上げる。これはアイヌの説話として説明されているが、申請者は、大正十三年出版の青木純二著『アイヌの傳説と其情話』以降の「紅スズラン」説話を丹念に追跡するとともに、その内容を検討し、大正十年代以降に北海道内の新聞記者たちが、「衰残民族」の視点からアイヌ民間説話として創作したと論ずる。それは、当時の新聞記者たちが、北海道の急速な開発と、政府の同化・皇民化政策によって言語や文化の保持継承が困難になりつつあったアイヌ民族の文化を、「衰残」「旧習古俗」の文化として認識したことによると指摘する。具体的には、当時の新聞人である青木純二、工藤梅次郎などは、アイヌ民族の文化を正しく受容せず、日本人の美意識で創作した物語をアイヌの伝説集として編纂した。そのため彼らが記した「伝説」はアイヌ文化の伝統的伝承を踏まえず、物語化された後も伝統行事への回帰は果たされなかった。ここには和人のアイヌ文化受容の不確かさの問題があったと指摘する。

第三章では、北海道における義経伝説の伝承実態を把握し、その数量的データと地域的差異を明らかにし、現在に至る伝説生成の過程に考察を加える。ここでは、義経伝説の多くは中世・近世の文学や説話などによって形成されているが、この論文が対象とする近現代の北海道における義経伝説は、近世・近代における蝦夷地・北海道の「内国植民地」化政策のもと、アイヌ民族との関連を装いながら広まった。そこには厳しい環境下で生活する北海道移住者が義経伝説を受容する素地として、義経がもつ悲劇性への共感があったのではないかと推測する。申請者は北海道内の義経伝説の存在を一一〇ヶ所余で確認できたことを一覽で示し、その分類を試みるとともに、道南の日本海沿岸地域にその五割が、太平洋沿海地域に三割が存在し、分布に偏りがあることを指摘する。さらに、明治期の日露戦争以後には、近世から伝承されていた義経蝦夷地・大陸北行説、義経ジンギスカン説をもとに、この伝説がさらに喧伝されていったことを予測している。

また戦後には、本別町の例に見られるように観光、まちづくりの目玉として利

用され、現在も義経伝説の再生成活動が続いていることを述べる。

第四章では、近代以降に北海道へ移住して来た人たちが出身地から持って来た民間説話の実例を示し、これが移住地でどのように定着し、展開しているのかを考察する。対象地域は明治十年代に石川県などから移住した人々が開いた白石村番外地（現札幌市・厚別地域）を取り上げる。同地域は三千人の純農村であったが、一九六〇年代からの札幌市による副都心化事業でベッドタウンとなり人口が十三万人に激増した地域である。こうした急激な変化のなかで、この地域にどのような民間説話が伝えられているのかを検証し、出身母村である石川県の昔話「鳥呑み爺」などの伝承であることを確認し、これが移住者である祖母から、その子孫へと女性三代にわたって語り継がれていることを明らかにする。さらに母村の「生活の知恵」的な俗信も、開拓生活のなかで語られ、内容が変化しながらもこの地への定住をはかる役割を果たしたと述べる。

第五章では、およそ百年にわたる産炭地の歴史をもつ夕張と赤平地域での調査

を通して、炭鉱（ヤマ）の労働・生活から生成された民間説話を取り上げる。調査時には、夕張の炭鉱は閉鎖され、人口も全盛期の一〇分の一となり、過疎化高齢化が進んでいるが、居住者の間には炭鉱時代に生成された民間説話が存在し、それは炭鉱をめぐる地域史のなかで伝承されていると指摘する。また研究者、マスコミが取り上げる炭鉱（ヤマ）の伝承が、この地域に生活した関係者の実態とはかけ離れていることを、強力道信氏の手紙との対話などを通して明らかにする。

第六章では、北海道開拓に関わる民間説話生成の過程について、北広島市に伝承されている大蛇神社伝説を取り上げる。この伝説は、明治中期に移住した一人の古老の話がもとになり、その後郷土史家、図書館、マスコミや子どもや大人の紙芝居づくり関係者などによって紹介され、その過程で内容が変化し、地域住民の伝説として成長していることを明らかにする。そして、隣接する札幌市での就労者が多いベットタウンとして発展した北広島市地域のまちづくりに、この伝説の果たした役割が大きいことを述べる。

第七章では、北海道南部を中心に日本海沿岸（函館・江差く礼文・利尻）から東北地方まで分布する狡智譚「江差の繁次郎」話を取り上げる。この話は江差町のニシン漁場を舞台として語られているものであるが、その中には戦後まもなく「函館新聞」紙上で健筆を揮った中村純三の創作物としての「江差の繁次郎」話が多く含まれていることを指摘する。具体的には、函館新聞の記者であった中村純三が、昭和二十三年（一九四八）以降に創作した「江差の繁次郎」話を分析することによって、中村純三以前に存在していた江差の繁次郎話との関係を探るとともに、中村純三創作の江差の繁次郎話の特徴を検討している。そのため、ここでは創作者中村純三の人物像と創作の背景、そして創作された「江差の繁次郎」話の量的状況を把握することに力点が置かれている。

第八章では、巖谷小波、久留島武彦らによる口演童話運動の影響を受けて、北海道内で口演童話運動を行った塚本長蔵の活動を取り上げ、その活動のなかで既存の桃太郎や浦島太郎などの民間説話が新たに生成されて行く過程を明らかにす

る。塚本長蔵は、古典文学や落語などからの影響も受けて、その口演童話創作では、伝統的な民間説話を逸脱して自由奔放に説話を生成していることを検証する。そして、塚本長蔵の活動には、野村純一が指摘するように伝統的な民間説話を「無批判に同工異曲の風」にして広めた問題が内包されていることも指摘する。

以上が序章から第八章までの要旨であるが、終章では本論文の到達点としての次の五点をあげる。

(1) アイヌ民族と移住者である和人の文化的接触によって、伝承されているアイヌ文化とは異なる民間説話があること。

(2) 北海道移住後、生活の安定と心の拠りどころを求める気持ちが新たな民間説話(例えば、開拓談、生活の知恵としての俗信、寺院・神社の建立話など)を生成し、伝承されていく状況があること。

(3) 出身地の話が北海道の開拓生活の中で家族伝承として存在していたこと。そして、現在も変容しながら子孫に伝承されていること。

(4) テレビ等の普及、マスコミや出版活動、読み聞かせ、図書館やサークル活動とまちづくり等とが連動して一つの「民間説話」が次第に内容豊かに生成されて行くこと。その反面、伝承活動と「実態」との遊離との問題があること。

(5) 「江差の繁次郎」話や塚本長蔵の口演童話活動などに見られる事例のように、時代的背景のなかで従来から伝承されていた民間説話が翻案され、より広範囲に伝承されていること。

終章では、これに続けて今後の研究に向けた課題を明記する。それは、本論文では現在に残された口述資料によって研究を進めたが、ここにある民間説話は、移住者がある程度生活の安定が出来たときに自分の足跡を「自分史」「口述資料」として書き残したものである。しかし、こうした資料の多くは移住成功者によるもので、移住に失敗して出身地に戻ったり、出身地には帰れず、他の地で再起を余儀なくされたりした人たちの説話は、現在では聞くことが難しい。今後、こう

した人たちの声を発掘できるかなどの課題が存在することをあげている。

さらに本論文では「あとがき」の後に、「北海道民間説話関連年表」を附し、北海道における民間説話、民俗研究の推移を示していることも特記される。

論文審査の結果の要旨

阿部敏夫「北海道民間説話へ生成Vの研究」のねらいは、巻頭で「日本近代史における北海道とは何か、北海道に移住して来た人たちは、どんな民俗文化を生成し、北海道人としての帰属意識を高めていったのかを、民間説話の側面から探ろうとするところにある」というが、論文として評価できるのは、北海道に移住した所謂「和人」たちが、この地でへ生成Vした「民間説話」の具体相を明らかにした点にある。

論文末尾に附された「北海道民間説話関連年表」でも示されている通り、北海

道における口承文芸としての民間説話研究は、大正十二年出版の、金田一京助の『アイヌ聖典』、知里幸恵の『アイヌ神謡集』に始まると言える。北海道の民間説話研究は先住アイヌ民族の口承文芸を対象としており、北海道に移住した和人が伝える説話類についての研究は、昭和戦前期にいくつかがあるものの立ち遅れていた。昭和三十年代以降には、道内の和人に関する民間説話の集積と出版が進むが、その研究は平成になってからで、これを推進した一人が学位申請者の阿部氏であり、本論文は平成三年以降に発表された論考をもとに作成されている。

本論文は、「序章 本論の問題の所在と目的・テキスト・方法」、「第一章 北海道の民間説話伝承環境と研究史」、「第二章 和人創作の「アイヌ民間説話」」、「第三章 北海道の義経伝説」、「第四章 札幌・厚別の民間説話」、「第五章 産炭地 夕張・赤平の民間説話」、「第六章 北広島市「大蛇神社」伝説」、「第七章 中村純三版『江差の繁次郎』話」、「第八章 塚本長蔵と口演童話」、「終章 北海道民間説話の研究と今後の展望」の全十章からなる。第一章で北海道における

民俗研究や民間説話研究の歴史を検討し、これを踏まえて第二章から第七章で個別民間説話の研究を進めている。ここでは従来の研究で等閑視されていた和人による民間説話のへ生成Vとその展開に焦点をあてているのが特色で、この視点から北海道の民間説話のありようを明らかにしているのが評価できる点である。

具体的には、第二章ではアイヌ民族の説話とされる「紅スズラン」の由来譚を取り上げ、これは和人がアイヌ民族と交流する中で、新聞記者たちがアイヌの民族文化を「衰残」「旧習古俗」と認識し、情話という悲劇性を加えて和人の美意識によって創作した説話であると指摘する。第三章では、北海道に広汎に伝えられている義経伝説を取り上げ、これは道内一〇ヶ所以上で確認できるが、その分布はオホーツク海沿岸地域にはなく、これ以外の沿海地域に大半が存在すること、津軽海峡・日本海沿岸地域には義経とアイヌの娘との悲恋や地名由来伝説が多く、太平洋沿岸地域には義経がアイヌの秘伝巻物を奪ったり、漁業や農業の指導者となったりする伝説が多い、知床半島には弁慶なども登場し、大蛇退治をす

る伝説があるなど、地域差の存在を指摘をしている。これによって北海道における義経伝説の実相が明らかになり、今後の北海道における義経伝説研究の基盤を構築したといえる。こうした義経伝説について、近世の幕藩体制下におけるアイヌ民族支配や和人の入植など、北海道の開発・開拓と連動させて、その生成と定着を理解する試みが注目される。

第四章では、札幌市厚別区の実地調査で確認された石川県からの移住者による昔話や俗信と、これらが入植後の生活の中で継承されていく様相を明らかにしている。第五章は夕張市と赤平市の炭鉱社会の中で語られていた説話や、炭鉱夫からの聞き書きを叙述している。坑内という外界から遮断された世界での、事故死者の霊にまつわる話や禁忌など、炭鉱で働き、生活する人たちによって生成された説話や民俗についての迫真な語りが綴られている。第六章では、北広島市で祀られていた大蛇神社に関する伝説を取り上げている。大蛇神社というのは、開墾地の大樹の中にあつた蛇の遺骨を神として祀ったもので、その経緯が伝説として

生成され、郷土誌や新聞、絵本、紙芝居などさまざまな媒体によって変容していく過程を明らかにしている。

申請者の独自の視点に基づく北海道の民間説話などに関する本論文の成果の要点は、右の通りであるが、第二章の「紅スズラン」説話については、和人による一方的な創作といいながら、主人公とされるアイヌの民族文化におけるスズランの位置づけなど、和人とアイヌとの文化的な異質性については論じられていない。また第三章の義経伝説の生成については、江戸幕府の蝦夷地の内国植民地化、明治政府の海外進出政策と関連するというが、これについても論拠が十分に示されていないとはいえない。

本論文には、研究対象とする民間説話の生成や展開についての論述の不十分さがあり、今後補完されなければならない課題が存在する。しかし、本論文は、北海道の民間説話研究にとって、民間説話のへ生成Vという視点の有効性を具体的に示し、かつ集積に留まっていた北海道民間説話の研究を進展させた点は高く評

価できる。よって本論文提出者阿部敏夫は、博士（民俗学）の学位を授与される資格があると認められる。

平成二十六年七月十六日

主査 國學院大學教授 小川直之 ①

副査 國學院大學教授 花部英雄 ①

副査 国立歴史民俗博物館名誉教授
國學院大學大学院兼任講師 常光徹 ①